

## 近藤啓吾著 『續山崎闇齋の研究』

牛尾, 弘孝  
大分大学

<https://doi.org/10.15017/18129>

---

出版情報：中国哲学論集. 17, pp.79-87, 1991-10-10. 九州大学中国哲学研究会  
バージョン：  
権利関係：



評書

近藤啓吾著  
『續山崎闇齋の研究』

牛尾弘孝

前著『山崎闇齋の研究』（昭和六十一年、神道史学会）に引きつづいて執筆された本書をあわせ読むことによって、日本思想史上の巨峰ともいうべき闇齋の思想の全貌をうかがい知ることができるようになった。以下各篇ごとに内容の要約を試み、最後に評者なりの理解に即して見解を附してみたい（第二部の「山崎闇齋と若林強齋の神道説」については、簡潔にして的確に両者の神道説が説きあかされているので、要約はひかえさせていただくことにした）。

—

序 先ず本書の目次をあげると左記の如くである（便宜上、通し番号を附した）。

緒説

第一部

- (一) 靈元天皇の御聖徳
- (二) 『倭姫命世記』と山崎闇齋
- (三) 度会延佳と山崎闇齋―『倭姫命世記』をめぐり―
- (四) 『元元集美言』解説
- (五) 藤森神社と山崎闇齋

- (六) 『神代卷風葉集』に見える『卜部抄』
  - (七) 垂加靈社創祀の意義
  - (八) 山崎闇齋の葬祭説
  - (九) 垂加神道の根本問題―殊に『倭鑑』の起筆を通して見たる―
  - (十) 垂加神道の神拝次第について
- 第二部
- (一) 中世の克服と継承―山崎闇齋の立場―
  - (二) 山崎闇齋と若林強齋の神道説
  - (三) 度会延佳を思う
  - (四) 伏見稻荷大社所蔵大山為起関係文書を拜見して―『神拝伝初重』の感懐―
  - (五) 忘れられた垂加神道者松岡恕庵
  - (六) 無窮会所蔵岡田磐齋関係書について
- 索引

二

第一部

(一) 靈元天皇の御聖徳

山崎闇齋が生まれた天和四年(一六一八)は後水尾天皇の御代であり、なくなった天和二年(一六八二)は靈元天皇の御代である。天皇は和歌の道に造詣が深く、歌論および御集が残されており、そこにはわが国の悠久と国民の幸福が詠じられている。その靈元天皇はあえて讓位なさり、御子東山天皇即位の際に、二百二十余年中絶したままであ

大嘗祭を、幕府の強圧のもとで挙行せられた。それをたすけた撰政の一条兼輝は、閻齋の垂加神道を学んでおり、天皇自身もその神道説には心を寄せられていたのである。

(二) 『倭姫命世記』と山崎闇齋

『倭姫命世記（やまとひめのみことせいぎ）』は、伊勢神道の教典とされる「神道五部書」のひとつである。鎌倉時代中頃には成立していたようだが、江戸に入って最書にこの書に注目した人物が闇齋であった。闇齋は北畠親房の『元元集』に引かれた『倭姫命世記』に依拠し、当時の天下の孤本であった岡本本（上加茂社祠官・岡本保可の秘蔵する『倭姫命世記』）に削補をほどこして、自筆考定本『倭姫命世記』を作った。

闇齋が『世記』の考定になみなみならぬ努力を費やしたのは、この書に神道の根本がつくされていると信じたからである。それはこの書に「心神（内なる天神）」なる語があり、闇齋の天人唯一の思想を導くものとなったこと、さらに「左の物を右に移さず、右の物を左に移さず、左を左とし右を右とす云々」という簡潔な表現のなかに、ものごとに対する敬（つつしみ）を感得するに至ったことがその理由である。

(三) 度会延佳と山崎闇齋―『倭姫命世記』をめぐる―

『陽復記』の著者として有名な伊勢の外宮祠官度会延佳（わたらいのぶよし）は、北畠親房の『元元集』によって、『倭姫命世記』の価値を知り、寛文九年（一六六九）に上京の際、岡本本『倭姫命世記』を写すことを得た。それを周旋したのが闇齋ではないかと推定せられるが、これが機縁となつて両者のあいだに交流が生まれ、闇齋は延佳から伊勢神道の説を伝えられることになったのである。

(四) 『元元集美言』解説

『元元集』は、北畠親房が国体の根本を明らかにしようとして著した神道書である。その内容を高く評価して自分の学問に深く取り入れた最初の学者が、山崎闇齋であった。伊勢の神宮文庫にのみ所蔵されている『元元集美言』は、『元元集』より二十五条を抄録した小冊子であり、従来まったくかえりみられることがなかった。

このたび『元元集美言』が、闇齋の編と断じうる根拠をあげ、かつ闇齋が本書を編した目的（わが国の無窮たるべき所以など）を考え、さらに神宮文庫の許可を得て、全文を忠実に翻刻し、闇齋の神道を知る上の重要な資料たらし

めんとした。

(五) 藤森神社と山崎闇齋

藤森神社は京都南部にあり、『日本書紀』の編者舎人(いえひと)親王を奉齋する古社である。闇齋は明暦三年(一六五七)四十歳のときに、『倭鑑(やまとかがみ)』の稿をおこさんとして、藤森神社に詣でた。それは親王が『日本書紀』の編纂にあたり、古伝古記録をみだりに取捨することなく、素直に採録しておかれた態度にならわんとしたからであった。

闇齋はさらに寛文十一年(二六七一)五十四歳のときに、吉田家より垂加霊社の号を授けられ、その感動のなかで『藤森弓兵政所記』を撰した。闇齋はこの記において、神道の根本を敬(つつしみ)にあると断じ、親王の『日本書紀』編纂の態度を敬の至りであるとたたえ、神皇の正統の永続を説いている。実はここに朝廷の衰微をなげき、徳川氏の専横をいきどおる闇齋の深き思いを読みとることができる。その意味でこの記は、闇齋の垂加神道樹立の宣言であるといつてよい。

(六) 『神代巻風葉集』に見える『卜部抄』

山崎闇齋が編纂した『日本書紀・神代巻』の注解『神代巻風葉集』には、卜部兼文の『积日本記』、忌部正通(いんべのまさみち)の『神代巻口訣』、一条兼良の『日本書紀纂疏』や、卜部家(吉田家)の諸説が取りいれられている。卜部家の説でも特に多いのが、卜部兼俱(一四三五―一五一一)の『卜部抄』、すなわち『日本書紀神代抄』である。しかしそこには闇齋の評価批判が、つねに先学の諸説を広くかつ厳しく批判検討した上で成されており、みだりに私の判断によるものでなかったことが読みとれる。

(七) 垂加霊社創祀の意義

吉田神道ではその人物の死後、遺骸の上に小祠を建てて、これを霊社と称することはあったが、その生前に自己の神霊(みたま)を箱型の霊壘(れいじ)に封じて、垂加霊社という生祠をつくり、みずから祀った例は闇齋がはじめてであった。それは高皇産靈尊(たかみむすびのみこと)の命により、国土を献上した大己貴命(おおなむちのみこと)の奇魂(くしみたま)と幸魂(さきみたま)を奉祀する三輪神社(奈良県桜井市)にならったものである。

このように闇齋が垂加靈社を生前に創祀した意義は、自己の心霊（心神）を肉体より抽出して靈壘に封じ、わが生涯のみならず、これを留めて永遠に皇統の守護と国土の保全に任ぜんと期したからである。

#### (八) 山崎闇齋の葬祭説

闇齋にとつて神は唯一絶対の超越者ではなく、神代という古代に、わが国の建設の基礎を築くために活躍せられた血脈あい通ずる靈的な父祖であった。その天神の神霊をそのままにうけたわが心、すなわち心神（みたま）を靈壘に封じて、みずからの存命中にみずから祭るために垂加靈社を創始したのである。なぜそのようにしてまで生死の落着に意を用いたかという点、闇齋個人の救済にとどまるものではなく、皇統の守護と国土の保全を無窮に願わんとするものであったからである。

このことを最も端的簡明に祖述したものが、若林強齋所講の『神道大意』であり、やがてその精神、時勢を得てはとぼしり出たものが、幕末の勤王討幕の運動であった。幕末明治初年にかけて、離檀神葬の運動が有志の間に推進されたが、それは直接には平田篤胤の靈魂説に指導せられているとはいえず、それを受容する基盤として、各地に深く浸透していた闇齋の垂加神道の思想があつたことを認めねばならない。

#### (九) 垂加神道の根本問題

―殊に『倭鑑』の起筆を通して見たる―

『倭鑑（やまとかがみ）』は、北宋の范祖禹が唐代の史事を論断した『唐鑑（とうがん）』にならつた名称である。闇齋は明暦三年（一六五七）わが国の歴史を正さんとして、『倭鑑』の編纂に着手したが、意に満たぬところがあつて、晩年に改稿せんとし、旧稿をすべて焼却したため、今日伝わっていない。しかし幸いにしてその目録が『垂加草』附録におさめられており、それによつて闇齋の神代観、すなわち歴史観を知ることができる。

たとえば水戸光圀の編纂した『大日本史』は、神代を除いて神武天皇より書きはじめられている。闇齋はそれとちがつて、『倭鑑』を神代より書きはじめ、神武天皇を天照大神から数えて六代めに位置づけているのである。このことは闇齋が神代即人代、天人唯一（天人一貫）の考えかたに立ち、上代の神々はわれらの祖先であり、神々の活動はわが国の歴史の出発を示すものと、固く信じていたことを知らしめるものにはかならない。

(十) 垂加神道の神拝次第について

垂加神道をおこした闇齋は、思想的には神学の研究に重点をおき、実践的には神拝の次第（作法）を定めるところよりも、神に詣でる感動をみずからに体認することのほうが、より重要な問題であるとした。闇齋は神拝の次第について論説した成書を残しておらず、その意味では闇齋の神道説に橋家神道の行事をとりいれて垂加神道を体系づけた玉木正英（たまきまさひで）の『神拝次第』・『神拝次第秘訣』等を参考にしなければならない。

吉田神道における神拝の作法と意義を説いたものには、講者不明の『神拝之伝』があり、また伊勢の神宮文庫には多くの神拝次第書が伝わっていて、吉田にくらべると伊勢のほうが簡潔明瞭である。玉木正英（一六七二？—一七三六、号は葦齋）の説く神拝の作法と意義には、明らかに伊勢神道と吉田神道の影響が認められ、また橋家神道の説を承けながらも、基本的には闇齋の神道説を忠実に継ぐものといえることができる。

第二部

(一) 中世の克服と継承—山崎闇齋の立場—

闇齋の学問的な方法については二つの大きな特色がある。自著に引用する際には、必ず原書によってなし孫引きをせず、典拠を一々精記しておくことは、江戸に入つて闇齋が始めておこなつた学問的な態度であつた。当時の官学を代表する林羅山の著書を見るに、いづれもその引用はすべて孫引きである。つぎに経書（『論語』や『易経』など）の訓読においても、平安朝以来おこなわれてきた和文調の濃い古訓を脱却して、新時代にふさわしい簡潔で明快な和訓をほどこしたことである。

闇齋のこのような学問的態度と同様に、その学問の本質にも二つの大きな特色がある。仏教を捨てて儒教に帰したことが先ずあげられる。妙心寺の禅僧であつた闇齋は、朱子学こそが新しい時代を指導するのにふさわしい学問であると信じたからである。しかし闇齋は室町初期の神道家である忌部正通（いんべのまさみち）の『神代口訣』のなかに、「心神（内なる天神）」なる語（すでに伊勢の「神道五部書」等に見える）を発見し、この語に沈潜することにより、闇齋は朱子学を通過し、天を抽象的な天理ではなく、天神（いのちの根源）と理解し、天人唯一・神人一貫の境地を体得するに至つた。垂加神道はこの自覚の上に樹立せられたものといつてよい。すなわち闇齋にあつては、近世

の開拓は同時に中世の復活継承であった。

(二) 山崎闇齋と若林強齋の神道説

(三) 度会延佳を思う

度会延佳(一六一五—一六九〇)は、伊勢の外宮(げぐう)祠官の家に生まれ、儒学の深き教養があり、仏教にも広い寛容を有し、伊勢神道の近世化に大きな貢献をはたした神道界の巨峰である。しかし従来延佳研究はすこぶる不十分であるが、幸いに『神道大系』伊勢神道(下)のなかに、『陽復記(ようぶくき)』・『中臣祓瑞穂鈔』・『太神宮神道或問』・『日本書紀神代講述鈔』といった主要な著作がおさめられており、これからの研究が期待される。

延佳と闇齋のあいだには、『倭姫命世記』を通じて学問的な交流が生じ、闇齋は延佳より伊勢神道の説を伝えられることになったが(第一部の「度会延佳と山崎闇齋」を参照)、垂加神道の成立を考える上で、延佳の影響はもっと深刻に取りあげられねばならない。

(四) 伏見稲荷大社所蔵大山為起関係文書を

拝見して—『神拝伝初重』の感懐—

大山為起(一六五一—一七二三)は、京都伏見の稲荷大社の旧家のひとつ松本氏の出身で、出でて大山氏の養子となった。延宝八年(一六八〇)三十歳のときに闇齋の門に入り、師の最後まで侍していた最も篤実な門人であった。『日本書紀』全巻の講義である『味酒(みさけ)講記』等が、伏見大社に蔵されている。その同所蔵のなかに、撰者不明の『神拝伝初重』と名づけられるわずか六葉あまりの小冊子があり、神拝の意義が明快率直に説かれている。内容的に闇齋の敬神の意をきわめてよく継承していること、さらに神官たるものの本義と責務をくり返し説いていることからして、この神社にかかわる大山為起の著と推定され得る。なお『神拝伝初重』をここに掲載させていただくことにした。

(五) 忘れられた垂加神道者松岡恕庵

松岡成章(一六六八—一七四六、字は玄達、号は恕庵)は、本草学者としてのみ著名であるが、実はその生涯にわたって闇齋を仰ぎ、垂加神道を修めてやまぬ人物であったことを知る者は少ない。その著書には、『日本書紀・神代

卷』の講義『埴鈴草（はにすずぐさ）』・『中臣祓師説』・『埴鈴翁神道語録』など多数あり、伊勢の神宮文庫に蔵されている。なお『日本書紀通証』の著者谷川士清（たにがわことすが、一六〇九—一七七六）が、松岡恕庵に学んでいることを看過してはならない。

(六) 無窮会所蔵岡田磐齋関係書について

岡田正利（一六六一？—一七四四？、号は磐齋）について従来ほとんど知られることがなかったが、谷省吾氏の『岡田正利の自叙伝・磐齋記』（『皇学館論叢』六の二）によって、これからの研究の土台が築かれることとなった。磐齋は闇齋の高弟正親町公通（おおぎまらきんみち）に師事し、あわせて公通の高弟玉木葦齋にも従学しており、その著書には『日本書紀事跡抄』・『古事記事跡抄』・『先代旧事記事跡抄』等が、無窮会神習文庫に蔵されている。その三書はいずれも七十八、七十九、八十歳という年齢が記されており、老軀を押して根本古典の註解に努力していることが知られる。

三

本書『続山崎闇齋の研究』は、前著『山崎闇齋の研究』とあわせて読まらるべきもので、本書執筆の意図は、その序に「前著は、闇齋の神道説の根本が何であったかを明らかにしながら、私の学問の不足のため、その神道説の樹立のために朱子学への沈潜が大きな要因契機をなしていることを明らかにするに止まらざるを得なかった。その後四年、私は闇齋の神道説の究明に専心し、このごろようやく、その説の抛って立つところ、目標、そしてその実跡の跡について、得るところがあった」と記されている通りである。

著書は『浅見綱齋の研究』（昭和四十五年、神道史学会）・『若林強齋の研究』（昭和五十四年、同上）・『山崎闇齋の研究』（昭和六十一年、同上）という崎門学研究の三部作を世に問うておられることからわかるように、一貫して崎門学の研究に従事してこられた。あわせて若林強齋の神道説をおさめた『垂加神道（下）』（昭和五十三年、『神道大系』論説編十三）と闇齋のそれをおさめた『垂加神道（上）』（昭和五十九年、『神道大系』論説編十二）を刊行

され、神儒兼学の立場をくずすことのなかった闇齋・強齋の学問的特色が明らかになるよう深い配慮がなされている。本書第一部は十篇の論文、第二部は六篇の論文で構成されており、内容についての大体はすでに紹介した通りであるが、随処に著者の特徴である厳密な書誌学的調査を極めた上での綿密な体験思索の跡を読みとることができ。特に「垂加靈社創祀の意義」・「山崎闇齋の葬祭説」・「垂加神道の根本問題」・「垂加神道の神拝次第について」の四篇には、闇齋の垂加神道の神学的立場の本質がくり返し説かれ、闇齋の生死の落着、靈魂観、歴史観が詳述されている。序に「そもそも私にとつて、闇齋の研究とは、自己の究明であり、それは即ちわが生死の落着に關する沈潜であったといわねばならない。されば本書の執筆は、闇齋を仰ぎつつ、自分自身に確認せんとする努力に外ならなかった。その意味において、本書は、いまの私自身である。」とあるように、著者にとつて、闇齋―綱齋―強齋の研究は、学界に裨益するための単なるアカデミックな研究ではなく、自己の本質の究明につながるものであったのである。

浅学をかえりみず、書評をさせていただいたが、著者のように生きた学問をする学者の少ないことをあらためて痛感した。その意味において、本書に先んじて出された『講学四十年』（平成二年、近藤啓吾先生古稀記念出版会）は、著者の研究の足跡を知ることができるだけでなく、著者の人柄・学問に親しく接することができる好著である。なお著者には浅見綱齋の名著『靖献遺言』に解釈をほどこした『靖献遺言講義』（昭和六十二年、国書刊行会）、儒葬と神葬の関係を詳細に論証された『儒葬と神葬』（平成二年、国書刊行会）などがあることを附記しておく。

一九九一年（平成三年）二月二十日発行

神道史学会（臨川書店発売）八七〇〇円